

TEV 訳では、「デリケート」と訳しています。

どのくらいデリケートで壊れやすいのか、理解して対応策を練りながら、共に生活していたら、その弱さが祈り（夫の神に向かう心）の妨げとならないことでしょう。

産褥期に精神的な安定を欠き、大きな試練に遭われた Y 子さん夫婦がおられました。Y さんは、健全で仕事ができ、人柄もよくて同僚からの信望の厚い人です。出産のために仕事を辞め、時間ができたからと多くの奉仕を引き受け、日夜それに打ち込んで無事に出産をしたのですが、母乳が出ずに看護師に言われたきつい言葉に、自分を追い込んでしまったのです。錯乱状態に陥り、夫、家族、牧師でさえも、結婚を続けられないと悩んでしまう程でした。でも、実家に引き取られ、温かいサポートの中、母子共に生活していくうちに、時間はかかりましたが完全な回復をしていきました。この時期の不安定さゆえの一時的なものだったのです。

しかし、そこで夫婦関係が崩れたり、子どもと引き離されたら、一時的では終わらないかもしれません。この時期に無理をすると、バランスを崩しやすいことがいくつかのケースで見られました。精神的にも、身体的にも、やはり特別疲れやすい、睡眠や休息の必要な時期なのです。そして PMS(月経前緊張症・症候群)のように多くの場合は一時的なもので(この時点を開始点とする病もありますが)回復の希望を持ちつつ、大きな決断は避け、周りのサポートを手厚くしていかれたいと願うのです。

出産の苦しみ

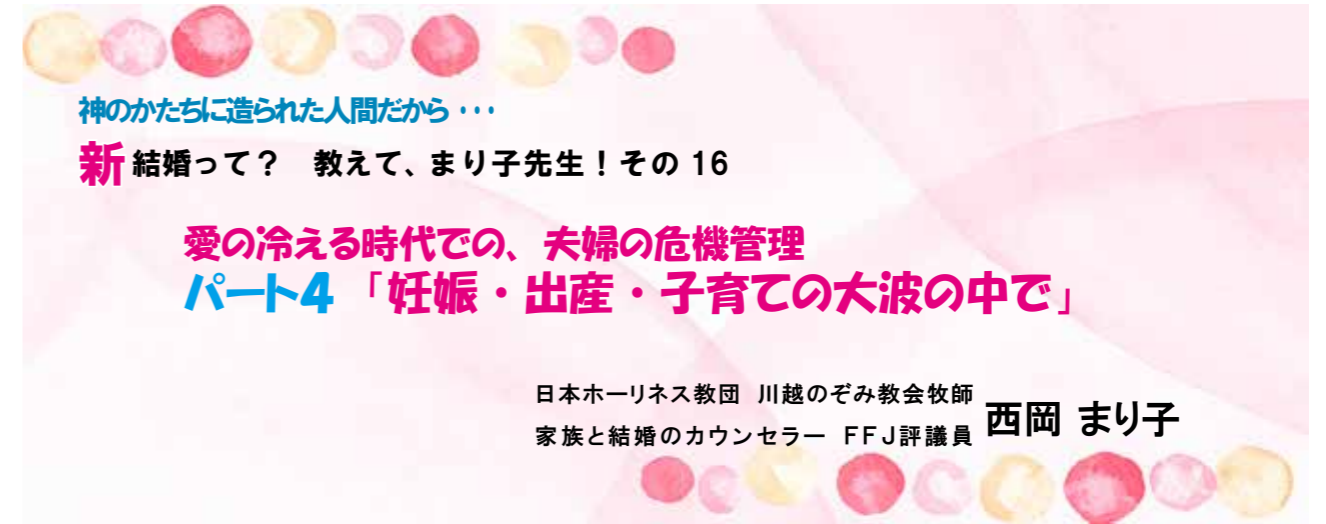
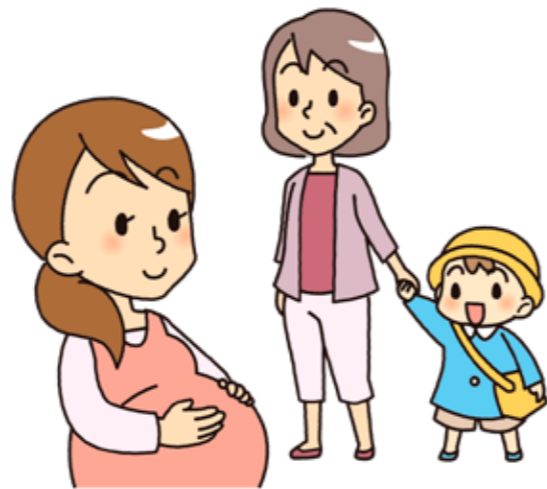
とても残念なことですが、エバが神を裏切った結果として、おめでたい出産が「苦しんで子を産む」(創世記 3:16) ことになり、夫との関係も相互対応する「ふさわしい助け手」(創世記 2:18) から夫を恋慕う(罪がカインを恋慕う=のどを締めるように激しく求める)ようになり、夫は支配するようになったとあります(創世記 3:16) 妻の夫への求め方も、夫の妻への対応も気を付けしないと罪ゆえの「のろいのパターン」に入り込んでしまうのです。

さて、9か月の妊娠生活に疲れ(耐え)、一日も早く自由になりたいと出産の日を楽しみにする筆者でしたが、生まれた後は自由どころか 24 時間 365 日営業の子育て業に足を踏み入れてしまいました。子育て!こんな素敵なことはない。と言い切れたら良いのですが、正直に言うと私は、子どもが苦手で、あまり子育てに向いてない性格なのです。なので、教会で育ちましたが、子どもたちが来ると知らんぷりをして自分の部屋に隠れてしまいました。そんな私が、留学した時に日本語教会で CS を任されることとなります。重たい気持ちで任に取り掛かるのですが、ある夜、火事の夢を見ました。迫りくる火の手から逃げなければ、と必死に逃げる道を探し進む時、という訳か、腕の中に赤ちゃんを抱えていました。自分の子どもではないのですが、この子も守らなければとしっかりと抱きかかえ、その子の肌のぬくもりや柔らかさに愛おしさを感じたのです。その日から変わりました。子どもたちへの愛おしいとの思いが芽生えてきたのです。

そんなこともあり、どうにか子どもたちと接する働きに携われるようになったのです。後には小学校(アメリカでの補習校)の教師も喜んずることができるようになりました。

さて、話を戻しましょう。通常、出産のときは援助の手がどうしても必要なので、実家などを頼りに里帰り出産をするか、自宅滞り出産を夫婦 + α であるか悩むところだと思います。

一般的な、両者のメリット、デメリットを考えてみましょう。



おめでた(妊娠・出産・新生児の育児)の陰に潜む危機

Children are a gift from the Lord; /they are a real blessing. 詩篇 127 篇 3 節 (TEV)
子どもたちは主からの贈り物・まさに祝福そのものである TEV の私訳

小さな子どもがいるだけで、周りの人に笑顔が生まれます。主からの贈り物であり、祝福である子どもたちが与えられていく時に、喜びと大きなチャレンジがあるのです。

妊娠・出産

いのちを懸けた大仕事の喜びと危機とは?

女性の一生の中で、とても疲れる時期が 3 回あると言われます。体が劇的に変わる時なのでしょう。最初は、初潮を迎える思春期。眠たくて何時までも眠っていたい、そんな記憶があるのでは? 2 回目は、すべての女性ではありませんが、妊娠中。そして、最後は、更年期です。疲れて当たり前の妊娠・出産・新生児の子育て時期、その喜びの裏に隠れている不安と疲れを今回は凝視してみたいと思います。そして、もちろん対策も練りましょう。

妊娠期(おめでた)の危機

「エイリアンがお腹の中にいる」と、自分の体内で自らの意志とは別に芽生え育まれている命を表現した人もいましたが、その表現さえも理解できるのです。悪阻があり、体温が上がり、身体が重く、疲れやすく、神経がとがり、とにかく過ごしにくい日々なのです。ホルモンが著しく変化するゆえ、この妊娠中から出産後 1 年ぐらいの母体の精神状態は異常心理期といわれます。私も身に覚えがあります。臨月に近いころ、急に赤ちゃんが生まれたら大丈夫だろうか、と不安になって涙が出てきたこと。家が汚いとイライラしていたこと。出産後に、地震があり不安と動揺が高まり、ニュースを見ると泣いていたこと。マタニティー・ブルーになり実家に無性に電話したくなったことなどです。

出産で、身体も心(精神)も疲れきっているため、産後 3 から 10 日、50 ~ 80% の産婦が、マタニティー・ブルーを経験すると言われます* 1。また、産褥精神病(一時的)では、錯乱、せん妄、困惑、無欲、幻覚妄想、躁鬱等の症状がでます。分娩後 2 週間以内に精神障害の発生することは比較的多く、1000 人に 1 人~ 2 人とわれ、育児ノイローゼ、虐待、自殺、の可能性が起こってきます。

日本では「母は強し」と言いますが、第一ペテロ 3 章 7 節には、

「夫たちよ。妻が自分より弱い器であることを理解して妻とともに暮らしなさい」とあり、「弱い」を英語の